

きら読 DAYORI

No.173 令和8年3月

きらりきらり読書だより

「日本一の読書のまち三郷」応援団長柳田邦男氏と子ども司書が読書ディスカッションを行い、「自分にとって大切な1冊の本」について語り合いました。参加した子ども司書は、ディスカッションの中で、紹介した本との出会いや、これから子ども司書としてどうやって本の魅力を伝えていくかなどを自分の言葉で発表していました。また、柳田氏より「感想を交流すること」の大切さについてお話をいただきました。

第19回読書フェスティバル 開催

読書ディスカッション「つながる ひろがる 本との出会い」



1月23日（金）三郷市鷹野文化センターで、第19回読書フェスティバルが開催されました。このイベントでは、読書ディスカッションや「全国家読ゆうびんコンクール」表彰式などが行われました。また、1月19日（月）～23日（金）までを読書ウィークとし、各小中学校で様々なイベントが行われました。



子ども司書が選んだ「大切な1冊」

書名	作者名	出版社名
ハリー・ポッターと賢者の石	J.K.ローリング/作 松岡 佑子/訳	静山社
なんでも魔女商会 お洋服リフォーム支店	あんびるやすこ	岩崎書店
とびたて！みんなのドラゴン 難病ALSの先生と日明小合唱部の冒険	オザワ部長	岩崎書店
しらすどん	最勝寺朋子	岩崎書店
さよなら、田中さん	鈴木 るりか	小学館
君の話を聞かせてくれよ	村上雅郁/作 カシワイ/絵	フレーベル館
わんぱくだんのゆきまつり	ゆきの ゆみこ/作上野 与志/作 末崎 茂樹/絵	ひさかた チャイルド

この本を読んで、本が好きになりました！

この本から、様々なことを学びました！

初めて自分で選書した本で読み聞かせをしました！



全国家読ゆうびんコンクール 表彰式



全国家読ゆうびんコンクールとは、読書で得た感動、伝えたいことを絵と文章にまとめて家族に伝えるものです。今年度の応募総数は13,155通でした。佐賀県や大阪府など全国各地からの応募に加え、ギリシャからも作品が届きました。



編集・発行：三郷市教育委員会生涯学習部
日本一の読書のまち推進課 ☎ 048(930)7818
〒341-8501 三郷市花和田 648 番地1 FAX048(953)1160

みなさんは、戦争について考えたことはありますか。戦時中の人々は、今では信じられないようなことを考え、痛みと苦しみを感じていたのです。

この本は、現代の日本で、母親とけんかして家出をした主人公の百合が、目を覚ますと戦時中の日本にいたというお話です。そこで偶然通りかかった彰に出会い、助けてもらいます。そして、そんな彰に、百合は惹かれていくのです。しかし、彰は、命をかけて、ほどなく戦地に飛び立っていく特攻隊員だったのです。のちに百合は現代に戻り、彰の本当の気持ちを知ります。

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』

汐見夏衛/著 三湊かおり/絵 スターツ出版

私は、百合が七十年前に迷い込んだときに見た新聞に書かれていた【昭和二十年六月十日】という言葉がとても心に残りました。昭和二十年は、終戦の年です。急にそんな時代に来てしまい戸惑っていた百合は、空襲に巻き込まれます。どうしていか分からなくなった百合は、思わず彰を呼んでいました。もし、私だったら、きっと声が出ないと思いました。そんな時に彰を呼ぶことができたのは、きっと、彰を心から信頼しているからだと思いました。

私が住んでいるこの日本で、昔そんなことがあったと知って、胸がしめつけられました。今とは全く違う環境で生きてきた人たちがいたことが分



三郷市子ども司書 14期生

指宿 彩音さん

今を全力で生きるために

かり、今を一生懸命生きていく責任があると感じました。この本は、戦時中の人々の考えが、痛いほど伝わってきます。みなさんも「今を全力で生きる」ために、ぜひ、この本を読んでみてください。

私が紹介する本は、『いいたい』があります！』です。この本は、小学6年生の陽菜子の心情をえがいた物語です。

陽菜子は、中学受験のために塾に行っているのに、さらに家事の手伝いをしています。洗濯物をたたんだり、食器を洗ったり。でも、兄の颯太は忙しいから家事はしなくていいらしい。それに陽菜子は不満もっています。

ある日、陽菜子が塾をずる休みしようとする、部屋に謎の少女スージーが現れます。家庭環境が似ている二人はすぐに仲良くなり、ました。その間にも、陽菜子と母の関係は悪くなっていくのでした。

『いいたい』があります！』

魚住直子/作 西村ツチカ/絵 偕成社

この本を読んで、私の心に響いた言葉は、「正しさはひとつじゃない」という言葉です。この言葉は、スージーが自分のお母さんに向けて言いたかった言葉でした。本の中で陽菜子は、この言葉を聞いて「頭をたたかれた感覚」と言っていました。私はなぜか心が温かくなりました。自分の思う正しさと相手の思う正しさは同じものではなくて、違うものだという事に気付く、母のことを思い出したからです。そして、私は、母に感謝しました。私が母に言いたいことは、陽菜子ほど大変なことではありません。母は、普段から自分の正しさを押し付けてくるのではなく、私のことを考えてくれ

わかり合うために

ています。私はとても恵まれていると思えました。最後の「やるなら本気でね。」という言葉にも衝撃を受けました。私はよく3日坊主になるので、「やる」と自分で決めたことは最後までやろうと思えました。この本を読むと、自分の環境や親子関係、友人関係に感謝の気持ちをもつことができるので、ぜひ、読んでみてください。



三郷市子ども司書 14期生

岡谷 有梨さん